

## 海上の森ミニセミナー第 19 回

### 海上の森 ～里山と奥山をめぐる生活空間～

日時：平成 30 年 3 月 24 日（土）13 時 30 分～15 時 30 分

話題提供者：伊藤 良吉 氏（NPO 法人海上の森の会 情報広報グループ）

#### ○ はじめに

海上の森は、イコールに近い形で「里山」といわれているのではないのでしょうか。COP10 の時は、里山は「SATOYAMA」と英語表記されていたこともありました。

しかし、「里山」という言葉は、使う人によってイメージが様々です。

今回は民俗学の立場から、里山とは何なのか？海上の森は里山なのか？海上とはどんなところだったのか？などを中心にお話します。

#### 1. 海上と里山

「里山」とは、「人里近くにある、生活と直結した山」をあらわします。明治時代には自然保護運動のはしりがありましたが、「里山」という概念によって「人里の近くにある山は貴重なので守らなければならない」という思いが込められました。



1960 年代、燃料革命が起きたことにより山が放置された頃に「里山」という言葉がどんどん発信されるようになりましたが、「里山」の具体的な地理的区分・内部構成・領域・所有などの細かい部分までは語られていませんでした。

「里山」という言葉が文献に初出したのは正応 4 年（1291 年）です。「里山」という言葉の意味に着目すると、以下のようにそれぞれ定義されています。

- ・ **環境省**：「里地里山」は、原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域。
- ・ **愛知県環境部**：およそ標高 300m 以下の地域で、地区の森林面積が全体の 65%以上を占め、100ha ほどのまとまりのある森林区域。
- ・ **国の山村振興法**：林野率 80%以上かつ耕地率 10%未満の市町村を「山間農業地域」、林野率 50%未満かつ耕地率 20%以上の市町村を「平地農業地域」、林野率・耕地率が両者の間となる市町村を「中間農業地域」。

海上の森（字海上、字若宮、字広久手）では、字海上においては総面積 506 町 7 反 7 畝 23 歩、森林面積は 448 町 4 反 7 畝 28 歩で林野率 96.4%、耕地面積は 11 町 1 反 6 畝 10 歩で耕地率は 2.2%です。立地と土地利用に着目すると集落の標高は 170～180m、山地の最高点は 390m。1 戸当たりの平均水田は 3 反 5 畝、畑は 7 畝、雑木山は 1 町 9 畝です。集落はシマと小シマごとに集居していますが、シマ、小シマが分散していました。これらを加味すると、海上は「山間農業集落」といえるでしょう。

また、明治 17 年の「愛知郡山口村地籍帳」によると、海上（字海上）の土地は合計 506 町 7 反 7 畝 23 歩で、そのうち官有地（小社地、雑木山、道路、溝梁、川）が 465 町 7 反 6 畝 2 歩、民有地（雑木山、田畑、宅地、藪、荒畑、草生、墓地、溜池）が 41 町 1 畝 21 歩と、ほとんどが官有地でした。ほかの地域と同様、海上もシマごとに氏神様があり、官有地の小社地である多度神社は宮内庁の所有地でした。

## ○人口動態

---

海上の森の人口はどれくらいあったのでしょうか。その動態をみると、

- ・ 文政 5 年（1822 年）：海上洞に 17, 8 戸（海上 13, 4 戸、四沢 2 戸ほど、塚原 2 戸ほど）
- ・ 明治 17 年（1884 年）：26 戸（海上 18 戸、赤津川～四沢 8 戸）
- ・ 明治 36 年（1903 年）：23 戸（海上のみ）
- ・ 明治 40 年（1907 年）ごろ：26 戸（海上 21 戸：北屋敷 7 戸、東畑 4 戸、向へ 10 戸、四ツ沢 2 戸、塚原 3 戸）
- ・ 大正 14 年（1925 年）：23 戸（海上のみ）
- ・ 大正中期～昭和初期：四ツ沢の 1 軒が瀬戸町へ転出、四ツ沢の 1 軒が中品野へ転出
- ・ 昭和初期ごろ：海上の 2 軒が山口へ転出
- ・ 昭和 10 年：塚原の 3 軒が山口堰堤の築堤で水没し、山口地区などへ転出
- ・ 太平洋戦争末期：名古屋市から 1 軒疎開し戦後尾張旭市へ転出、朝鮮労働者の一家が疎開し戦後北朝鮮へ帰国
- ・ 昭和 32 年：8 月の集中豪雨で海上の 1 軒が土石流の被害にあい、山口地区に転出
- ・ 万博問題の浮上時期前後：大半が山口地区に転出、2 軒の転入
- ・ 平成 12 年頃：海上最後の 1 軒が土砂災害の危険のため山口地区へ転出

となっています。海上の人々は、山口地区や瀬戸市内などに転出しており、何かあればすぐにでも飛んで来られるようにしていることから、故郷への思いが強いことがわかります。

また、平成 15 年頃までは、5 月 5 日の海上島氏神多度神社祭礼（多度祭り）に毎年 50 名ほどが参詣しており、離散者の拠り所、統合のシンボルとなっていました。

## ○家・屋敷から見た山里地

---

「洞1軒」や「五反百姓」という言葉がありますが、これらは里地と山地を区別する象徴的な言葉です。

### ・洞1軒

「洞1軒」は第一次産業の時代に「山地」で用いられた言葉で、山地に居住する家の数は山の潜在生産力によって決まることを意味し、いわゆる「人と自然との共生」の意味合いをもちます。山の潜在生産力には限界があり、「洞1軒」といって1つの洞（小さな谷）には1軒以上住めないといわれていました。それ以上住むと、結果的に共倒れや山の荒廃につながります。

### ・五反百姓

「五反百姓」は「里地」で用いられた言葉で、「家族（子ども5人、親2人、祖父母2人程度）が生活するには、水田を五反耕作する必要がある」という意味です。五反の水田を所有していなくても、地主から借りることで生活することができました。

海上ではどうだったのでしょうか。海上では水田・畑と雑木山をもっており、それらをうまく利用することで生活してきました。そのため、山地と里地の中間型、「山里地」であるといえます。

海上の里には、屋敷の裏に雑木山があり、表に田畑が広がる、典型的な里山の風景が広がっています。水田の収益と山の収益をみると、水田の収益は山の収益の10倍にもなり、水田をもつことはとても重要であることがわかります。また、窯跡が存在していることからかつてこの地で窯業が行われていたことがわかり、農業以外にも収入源があったことがわかります。

## 2. 海上の森とくらし

---

### ○海上の森の生活空間（その1）

---

#### ・海上川

海上川は、海上の人々にとって生活の根幹となる水源で、海上川の水を使って農業を営んできました。赤津川と合流して山口川、山口川は矢田川へと合流します。



#### ・海上のソンデ

海上で「ソンデ」という言葉は、中心集落から海上砂防池に向かう小峰を超えた辺りの西側を意味し、「ソンデの川原」「ソンデの畑」などといわれます。地形的には集落側からは尾根に隠れて見えない位置を意味します。

#### ・三河山間地のソンドヤマ

集落からは近くの山の峰に隠れて見るこのできない向こう側の山のことを意味します。

#### ・ソンドの語義と山の分類

ソンド・ソデは「外」を意味します。ただし、ソンドもムラの生活領域であり、生活領域の中に「内側」と「外側」をもっており、集落周辺の里の山（内側の山、海上では「セドヤマ」）に対する奥の山（外側の山、海上では「オクヤマ」）をいうことになります。里の山と奥の山を分ける言葉が「ソンド」で、土地の所有により分けられていると考えられます。また、「ソンド」は地域によって呼称の有無・意味が異なります。

### ○海上の森の生活空間（その2）

---

#### ・里の山（里山）

尾張東部山地ではセドヤマ・ウラヤマ（裏山）・イリグチヤマ（入口山）、三河山間地ではセドヤマ・ウラヤマ・ノキヤマ（軒山）・サトヤマ（里山：東栄町）、と呼ばれています。

#### ・奥の山（奥山）

里山の背後にある広大な山で、山間地に暮らす人々にとって季節ごとに利用される重要な生活資源の場です。県内の山地ではほとんどが「オクヤマ（奥山）」といい、「ソンド」というところもありました。

#### ・海上のセドヤマとヤシタ

セドヤマ（屋敷裏、耕地裏の山）とヤシタ（屋敷から川につながる斜面）は、農繁期を中心に日常的な暮らしの場となる集落周辺の山と耕地で、その多くが個人の土地、ワタクシの領域です。（地籍帳では、集落・耕地とそこに接する山が民有地）

#### ・海上のオクヤマ

オクヤマは、里山の背後にある広大な山であり、その多くが区有林や県有林（地籍帳では集落・耕地に接する山のさらに奥にある山が公有地）。農閑期の春先や冬場などに生活資源を採取するために入る、重要な生産の場、オオヤケの領域です。

#### ・海上の生活空間

海上の生活空間は、集落周辺の家・屋敷に接する耕地、屋敷・耕地に接するセドヤマ（里山）、その背後のオクヤマ（奥山）、を取り込む世界から成ります。

### ○セドヤマ・屋敷・耕地と暮らし

---

・クサカリバ：セドヤマと耕地の間にある幅2～5間の緩衝地をいいます。そこには木を植えてはならず、刈った草は牛馬の飼料などになりました。

・灌漑用水：川にある水の取り入れ口（ユ）から水田までの水路は「ユミチ」といい、ユミ

チの水は水田に入れっぱなしです。

- ・テアゼ：水田に入る水を温める構造で、ユミチから田に入った水は手畦と畦の間をゆっくり流れ、この間に日射しで温められます。
- ・溜池：平地池、桜池など4か所（明治17年には3か所）ありました。
- ・セドヤマ：山畑（柿畑、桑畑、椎茸山）とカタギ山（雑木山）からなります。
- ・個人山の植林：昭和30年代以降、カタギ山にスギ・ヒノキが植林されました。

## ○生活空間と開発

---

海上の生活空間には、里山と奥山、屋敷と耕地のほかに、個人名がついた山や藪（屋敷跡が放置されて藪になる）がありました。その名前は、所有者が変わっても残り続けました。山や藪を開発した先祖を重視しており、開発者の思いが子孫やその後の所有者に受け継がれています。

## ◆まとめ

---

海上では農業以外にも仕事があり、夏には奥山での山仕事、冬には護岸工事などで使用される川でざら石を拾う仕事をしており、そこで賃金を得ていました。田んぼの面積などを考慮すると暮らすことは難しいですが、農業以外の収入源があったおかげで、あれだけの人が暮らすことができたのです。

今後を考えると、ただ木を伐ったりすればいいのではなく、きちんとした管理をしていく必要があります。それには戸数が要ります。多くの人手が要ります。季節によってセドヤマ・オクヤマと場所を変えながら生活し、結果的に再生し持続可能な形で管理していく。そういったことを念頭に、対策をとっていく必要があります。